

第一章 言葉

■言葉の働き

「人は言葉で考える」とはよく耳にする命題である。物事を考へる場合に、言葉を使つて考へるのであるが、この場合の言葉は、普通、頭の中だけで働いてみて、普通の言葉のやうに発音を伴つて外に現れることがない。それで、発音を伴つた言葉に対して、考へるときに用ひる言葉を“内言”と言ふ。

幼児などは、よく独り言を言ひながら遊んでゐるが、これは考へるのに用ひる言葉がそのまま発音を伴ふ普通の言葉になつて外に現れ出たものであつて、それはやがて成長するにつれて発音を伴はない“内言”に變つて行くものである。

この事から、「言葉の生命は“思想”に在るのであって、“発音”に在るのではない」といふ事がよく解ると思ふ。(このことは、後に触れるが、極めて重大な命題である)

■人は言葉で物を見てゐる

ところで、人は物を観察する場合にも「言葉(内言)を使って物を観てゐる」ことが、今では実証されてゐる。例へば、次のやうな実験がある。

ここにいろいろな色や模様のある蝶の標本を納めた箱があつて、その中に、「地が黄色い色をした羽に、縞模様のある蝶が一匹あつたとしよう。その蝶を一匹だけ取り出し、これを数人の幼児たちによく観察させる。

さて、それから数時間経つた後、この蝶を元の標本箱の中に戻し、幼児を一人づつ呼び出して、「さっき見た蝶はどれだつたかな、当ててごらん」と言つて当てさせるといふ実験である。

この実験で、「正しく言ひ当てることの出来る幼児は、必ず“黄色”といふ言葉も、“縞”といふ言葉も、どちらも知つてゐる幼児に限られる」といふことが判つたのである。この言葉のどちらかでも知らない幼児には、決して正しく言ひ当てる事が出来ないのである。

それは何故だらうか。“黄色”といふ言葉を知らない幼児には、黄色い色は目に入りはするのだが、それを意識し、記憶するまでには至らないからである。

つまり、“黄色”といふ言葉を知つてゐて初めて「この蝶は黄色いな」と思ふことが出来るのであつて、この言葉を知らない幼児には、「この蝶は黄色い」と思ふことが出来ないし、従つて、「黄色い蝶だつた」といふ記憶が出来る訳がないのである。

だから、“記憶”や“知識”を頭の中に貯へるためには、先づ何よりも“言葉”が必要なのである。同じ経験をして、豊かな言葉を有^もった者は豊かな記憶が出来、豊かな知識を貯へることが出来るが、言葉が貧弱だと、記憶も知識も貧弱にならざるを得ないのである。

■言葉と知能との関係

フランスの言語・心理学者、ポール・シヨシャルの著書に『言語と思考』といふ本がある。それに拠ると、「フランスの学校における黒人の子供の学力や知能は、白人の子供よりも低い、それは生れつきに因るものではなくて、言語の習熟期（三歳〜五歳）を、語彙の貧弱なアフリカの社会で過した為である」と述べられてゐる。

シヨシャルのこの指摘があるまでは、一般に、漠然と「白人と黒人との間には、知能においても学力においても、明瞭な差があるが、それは生れつきに因るものである」といふ風に考へられてゐたものである。

ところが、シヨシャルは、黒人の子供たちの出生地や生育地を一々調査することにより、「フランスで生れ、フランスで育つた黒人の子供は、知能においても学力においても、白人の子供の平均値に少しも劣つてはゐない」と、「白人の子供より劣つてゐる子供は、アフリカで生れ、アフリカで育つた子供である」ことなどが突きとめられ、「白人の子供と黒人の子供との知能や学力の差は、生れつきに因るものではなくて、幼児期に習得した言語能力の差に基づくものである」といふことが明らかにされたのである。

■知能は幼児期に言葉で作られる

シヨシャルの研究は、「人間の知能は生れつきのものではない」こと、「知能は言葉によつて作られる」こと、それも「幼児期に作られるものである」ことなどを証明したものである、といふことが出来る。

言葉の学習では、「三歳から四歳までの一年間」は、成熟期、と名づけられてゐる。それは、この時期に母国語の基礎が概ね完成されるからである。この時期には、他のいかなる時期にも発揚されることのない、不思議に思はれる程に偉大な能力が発揮され、それで母国語に熟達することが出来るのである。

近年、著しい発達を見せた大脳生理学は、知能が幼児期に作られることを一層明確にした。大脳は、肉体の他の部分と同じやうに、二十歳までの間に完全に成熟する

のであるが、幼児期に限つてその発達が実に目覚しく、「生後の三年間にその六〇パーセントまでが作られる」といふことが明らかにされてゐる。

昔の人たちは、「三つ子の魂、百までも」と言つてゐて、大脳生理学やシヨシャルのやうな研究が無かつたけれども、「人間の基礎的な能力は幼児期に作られるものである」ことは、昔の人たちは体験的に知つてゐたのである。

■十歳で大学に入学する

『胎児はみんな天才だ』(祥伝社)といふ書物に依れば、スーザン・スセディック嬢は現在十六歳であるが、シカゴのイリノイ大学の大学院二年生である。大学に入学したのは十歳で、十四歳にはすでに卒業して大学院に入学してゐるのである。知能指数は二

〇〇を越えてゐると言はれる。

母親が、胎内のスーザンに常に語りかけてゐた影響に依るものであらうと考へられるが、生後二週間で「ママ」といふ言葉を発したといふ。普通では全く考へられない事であるが、これも「幼児期の言語教育が人間の知能を決定する働きを有つ」といふ事を証明したものといふことが出来ると思ふ。

また、アメリカで天才学者といふ評判のあつた、今日のサイバネチックの基礎を作つたと言はれるノバート・ウィナー博士も、一九一五年に十八歳で博士号を獲得してゐるが、大学に入学したのはやはり十歳の時であつた。

彼の父はハーバード大学の教授で、今、世界にハーバード大学にたゞ一冊しかないといふ『カール・ヴィツテの教育』といふ本を読んで、そこに述べられてゐる教育法を、その通り忠実に実践した結果さうなつた、といふことである。

ハーバード大学の教授の息子たちの中にはこの本を忠実に実践する者があつて、さういふ教育で育つた子供たちの中には、十歳で大学入試に合格する者がよくあると言ふ。その教育法の特徴は、「生れた次の日から始めなければいけない」といふ「言葉の教育」に在る。

■言葉の重さ

『カール・ヴィツテの教育』といふ本は、九歳でライプツヒ大学に入学して四年間、数学を専攻し、十三歳で素晴らしい論文を書いて哲学博士の学位を獲得、続いて法学を専攻して十六歳の時に法学博士の学位を獲得すると同時に、ベルリン大学の教授になつたカール・ヴィツテの父親が著述した本である。

父親の名前もカール・ヴィツテであつた。彼はドイツの片田舎に住む牧師であつたが、

当時の人が誰一人として考へてゐなかつた「幼児教育の重要性」とりわけ「言葉の教育の重要性」を深く信じてゐて、これを自分の子に実践した人である。

彼は、日頃、「子供を早くから教育すれば、たいていの子供は非凡な人間になれる」と主張してゐたが、当時の人たちは誰もその言葉を信じないばかりか、さういふ彼を馬鹿にさへしたので、それを人々に実証して見せるために、わが子に自分と同じ名前を付け、これを育てて見事に成功し、自分の日頃の主張を実証したものである。

然しながら、それでも世間の人々は彼の主張を信じなかつたのである。「カールは生れつきの天才だつたに決つてゐる。さうでなくて、九歳で大学に入れる訳がないではないか」さう言つて、人々はこれを教育の結果であるとは認めなかつたのである。

私などは、自分の実践もあるせいかも知れないが、ヴィッテの教育論に一点の疑念もなく信ずることが出来るが、世の中の多くの人々はどうしてこのやうに「信ずる」とい

ふ氣持が持てないものであらうか。私は不思議に思ふと同時に、実に残念でならない。孔子の「信無くんば立たず」、世の中で最も大切なものは“信”である。「これが無かつたなら世の中に生きる意味が無い」といふ言葉の重みを、今つくづくと私は感ずる。

『カール・ヴィッテの教育』といふ本は、一八一四年、息子のカールが十三歳で哲学博士になつて国中の評判になつた次の年であるが、かの有名なペスタロッチの強い奨めにより、カールに対して幼児期に行つた教育法について父親のカールが書いたものである。

父親のカールは、自分が子供に施した教育法を本にすることを嫌つてゐたのであるが、「それは人類にとって貴重な、せひとも必要な仕事なのだから」と言つて、ペスタロッチが強く懇請したので、断り切れずに著述したものであると言ふ。

■言葉の教育は生れた翌日から

その教育法の基本は、やはり、「言葉の教育」であった。それも、生れた翌日から、カールの眼の前に指を突き出して、カールがこれをじっと見詰めると、「指！ 指！ 指！ 指！……」と言って言葉の教育を始めた、といふ事が述べられてゐる。

このやうに、子供の眼の前にいろいろな物を取り出して見せ、その名前を繰返し繰返し発音して、これを聞かせたのである。そのため、カールは普通の子供よりもずっと早い時期から、はっきりと言葉が言へるやうになつた、と述べられてゐる。

ついで、カールを抱いて家の中を歩き回り、目に着く物の名前を一つ一つ教へて行つたのである。それが済むと、今度は家の外に連れ出し、そこでもまたカールの目に入る物の名前を教へて行つたものである。

かうして、言葉がたくさん言へるやうになると、その言葉を使つていろいろなお話をしてやった。毎日欠かさず、さういふ事を根気よくしてやったと言ひ。だから、五、六歳の時には、およそ三万語もの言葉が身に着き、それがカールの知能を偉大なものにした、と考へられてゐる。

■言葉は人間だけのもの

アメリカでは、一九三〇年以降、チンパンジーの子供を人間の子供と一緒に育てることによつて、両者の比較を調査する研究が盛んに行はれてゐる。

ケログ夫妻、ヘイズ夫妻、レイノルズ夫妻などの研究は特に有名で、早くから我が国にも紹介されてゐる。ケログ夫妻は、一九三一年、生後七か月半のチンパンジーを、

生後十か月の自分たちの子と、双子の兄弟のやうにして育ててゐる。

このやうにして、人間の赤ちゃんと全く同じ条件で育ててみても、チンパンジーの子供は言葉を覚えることが出来なかったと言ふ。このやうに「人類に次ぐ知能の高いチンパンジーでも言葉が覚えられない」といふ事は、「言葉が覚えられ、これを使ふことが出来るのは、この地球上の多くの生物の中でも、唯人間だけである」といふ事を意味するものである。

■言葉が人間を人間にする

一九二〇年、インドのカルカッタに近い、ゴタムリといふ村で、狼に育てられた二人の少女が発見された。二人を発見し、これを救ひ出したのはシング牧師である。アマ

ラと名付けられた少女は間もなく死んだが、カマラと名付けられた少女は、その後およそ十年間生きて、推定年齢十七歳まで、シング牧師夫妻の手で養育された。

その育児記録に依ると、乳児期から幼児期を通して狼に育てられたからであらう、四つ足になって走り回り、足で立って歩くことを教へても、なかなか改めることが出来なかったことが報告されてゐる。言葉が一言も話せなかったことは言ふまでもない。

食事の時には四ん這ひになつて、食べ物を口で直接に食べた。昼は部屋の隅で寝てゐることが多く、夜になると起き上つて遠吠えをしたと言ふ。育ての親である狼の真似をするといふ学習の結果である。

その中で、最も私が興味深く思ったことは「人間らしい感情を全く見せなかった」と報告されてゐることである。彼女は、どんなに喜ぶべきことがあつても決して笑つたことが無く、また、どんなに悲しいことがあつても涙一つ流して泣いたことが無かつた、とい

ふのである。

シング牧師は、言葉の教育にも努めたのにも関はず、その習得状況が極めて悪く、糖尿病で死ぬまでのおよそ十年間にわたる学習で、習得した言葉の数は僅かに四五語に過ぎなかったと報告されてゐる。

然し、僅か四五語の習得でも、日常会話が出来るやうになり、それからは、嬉しい事がある時には笑顔を見せるやうになり、また、悲しい時には涙を流して泣いたこともあった、といふことである。

このやうに、言葉を全く理解してゐなかつた時には人間らしい感情が全く無かつたのにも関はず、言葉を覚え、言葉が使へるやうになるにつれて、人間らしい感情が芽生へ、そして育つて行つたのである。まことに言葉は人間にする働きを有つたものであることがよく解る。私たちは、この点に注目する必要があると思ふ。

人間は、喧嘩をする時には自然と乱暴な言葉を使ふものである。優しい言葉を使つてゐたのでは喧嘩にならない。荒々しい心は荒々しい言葉を生むが、その反対に、荒々しい言葉は荒々しい心を作り出すものでもある。だから、人間らしい人間になるためには、何よりも先づ人間らしい言葉が、とりわけ美しい言葉が必要なのである。

■言葉は成功のための鍵である

多分もう二十年以上も昔の事になるかと思ふ。「リーダーズ・ダイジェスト」誌に、「偉大な言葉の力」といふタイトルで、アメリカの人間工学研究所が行つた“言語力調査”の結果が報告されたことがあった。

それに拠ると、「中学生・高校生・大学生から工場勤務者・大会社幹部・社長クラスまで、およそ四十万人といふ龐大な人々に対して言語力の調査を行ったところ、地位の上下や収入の多少が、言語力と全く正比例して居り、また、学校の成績も同様であった」と述べられてゐた。

このテストで最高点を取ったのは、アメリカでも著名な大会社の社長であったと言ふ。得点は二七二点であったと報告されてゐた。そして、大会社の幹部の平均点は二四〇点、課長級の平均点は一四一点、係長級の平均点は八六点……とこのやうに、地位の上下、収入の多少が、言語力と全く正比例してゐたのである。

これは、学校においても同じであつて、医学・工学・法律・経済……その専攻科目の如何に関はず、この言語力テストで最高点を取った学生は、その学部 of 成績においても、やはり最高の成績を納めてゐる者がほとんどであつた、と言ふ。

この調査の結果に拠り、「言葉の力は、学校においても、社会においても、成功するために最も必要な条件である」といふ結論を、人間工学研究所は下したのである。

これはアメリカの社会における調査の結論であるが、どこの国の社会においても、このやうな調査をすれば、やはり同じ結果が得られ、同じ結論に達するに違ひない、と私は思つてゐる。それは、「言語力の優劣が、吸収する情報や知識の多少を左右する」ものであるから、よくよく考へて見れば、それは極めて当然の道理だと思ふ。

同じ長さの時間だけ読書したとしても、その人の言葉の力が優れてゐるか否かによつて読書量に大きな違ひが現れるのは勿論であるが、その理解の深さに大きな違ひがあるので、同じ時間の読書から得られるものの価値に大きな違ひがあるのである。

■同じ“牛”を見ても

先に私は「人は言葉で物を見てゐる」といふことを述べた。そこで、ここに一頭の牛がゐると仮定しよう。私たち日本は、「あ、牛がゐるな」といふやうに“言葉”を使ってそれを見る。つまり、私たちは、日本語の“牛”といふ言葉を使ってこれを見てゐるのである。

ところが、アメリカ人やイギリス人だと、これを「英語を使って見る」のであるから、その牛が cow か bull か ox か、そのいづれであるかを先づ見定めて、それから「oxがゐる」とか、「cowがゐる」とか、と思ふのに違ひない。

更に言ふならば、oxといふ言葉は、それが一頭の時に限って使ふ言葉であつて、二頭以上ゐる時には oxenといふ言葉を使はなければならないのである。

それ故に、日本語の“牛”のやうに、性や数に全く関係の無い言葉を有たないアメリカ人やイギリス人は、牛を見る時には、必ず、「牡わすかな、それとも牝めすかな」と考へ、更に、「何頭ゐるか」までを観察しないわけには行かないのではないだらうか。

いづれにせよ、私たち日本人が見る時に思ふやうな「あ、牛がゐる」といふ、性や数に全く関はりの無い、単純な見方は、さういふ言葉が無い以上、いくらしたいと思つても出来ないのではないだらうか、と私は思ふのである。

■松虫かな、鈴虫かな

“牛”の場合、アメリカ人やイギリス人に比べて非常に単純な見方をする私たち日本人も、秋の鳴く虫となると決してさうでは無い。「リーン、リーンと鳴く“鈴虫”かな。

それとも、チンチロリンと鳴く“松虫”かな」といふ細かな見方をするのである。
 “牛”では細かな見方をする欧米人だが、鳴く虫となると細かな見方が出来ないの
 である。なぜかと言ふと、日本人なら誰でも知って使つてゐる“鈴虫”や“松虫”“蟋蟀”
 を表す言葉が、欧米人の生活用語の中に存在してゐないからである。だから、これら
 の虫は皆、同じ物としてしか見えないのである。

■言葉は民族の特色を表す

“牛”については cow か、bull か、ox かといふやうに、細かな見方をする欧米人が、
 “虫”だと実は大雑把な見方をする。その反対に、“牛”については大雑把な見方をする
 日本人が、“虫”だと“松虫”か、“鈴虫”か、それとも“蟋蟀”か、といふやうに細かな見
 活の違ひから生じたものである。
 方をする。その原因は、直接的には、言葉の違ひにあるわけだが、その言葉の違ひは生
 活の違ひから生じたものである。

英米人は、昔、長い年代にわたり、牧畜を生活の拠り所としてゐたから、私たち日
 本人のやうに、性や数を超越した“牛”といふ言葉よりも、cow や bull のやうな性を伴
 った言葉の方が必要だったのである。

それに反して、農耕を生活の拠り所として一定の土地に住み続けて来た私たち日
 本人にとつては、“牛”といふ言葉があればそれで十分であり、それよりも、大切な季
 節の移り変りを知らせてくれる“虫”の方がずっと関心が深かったので、虫の形や鳴き
 声の違ひにも敏感で、従つて、これを“松虫”“鈴虫”“蟋蟀”といふやうに区別したので
 ある。

日本語の再発見
 言葉は、人々が生活を営んで行く上の必要から作り出したものが多いので、生活の

仕方が異れば、必要な言葉もそれに従って異つてゐるのが当然である。それで、牧畜民族には牧畜に必要な言葉が多く作られ、農耕民族には農耕に必要な言葉が多く作られたのである。

■人が作った言葉が人を作る

このやうに、言葉は人々がその生活の必要から、次いでその生活を豊かなものにするために、「人が作ったもの」であるが、すでに述べたやうに、「人は言葉で考へる」ものであり、また、「言葉で物を見る」ものであるから、「人は言葉によって作られる」といふ逆の面があることに注目する必要がある。

「人が言葉を作る」「作られた言葉が人を作る」「作られた人がまた言葉を作る」

……の相互作用を重ねることにより、人間は向上し、言葉も向上して豊かさを増し、現在の高い文化を人類は享受することが出来るやうになつたのである。

■美しい言葉を使はうとする努力

前に述べたやうに、「優しい言葉は優しい心を生み、荒々しい言葉は荒々しい心を生む」ものであるから、私たちは美しい日本語を使はうといふ努力をし、美しい日本語を育てる努力をする必要があると思ふ。

孔子が弟子の子路に、「先生がもしも国政を任せられたとしたら、どこから先に手をお付けになりますか」といふ質問を受けた時、「必ずや名を正さんか」と答へたことが、『論語』に見えてゐる。

この「名を正す」の「名」とは、窮極的には言葉のことであるから、「名を正す」とは「言葉を正す」といふことにはかならない。孔子のこの答へに対して、子路が、「それは何とも迂遠な事ではありませんか」と言ふと、孔子は、「名正しからざれば言順ならず、言順ならざれば事成らず」と言つて、「言葉の乱れが人の心の乱れ、人倫の乱れを惹き起してゐるのであって、これこそが今の世の乱れの根本的な原因なのだ。どうして迂遠なものであらうか」と、子路を論じてゐる。

言葉は人の心を養ひ、人を作るものであるから、人の住む世の中を良くも悪くもする働きを有つものである。だから、私たちは、正しく美しい言葉を使はうと努力することが必要であり、大切な事なのである。